

去年関西を舞台にしたふたつの映画を見て、たいへん戸惑った。「阪急電車」では、関西弁のおばさん集団が、電車内で大声を上げて話しまくって、厚かましくも人の席まで奪ってしまう。また「プリンセス・トヨトミ」でも、関西弁のおばさん集団が、狭いエレベーターの中で、周りの客を省みず騒々しく話をやめない。見ていて、情けなくてならない。ここに面白げに描かれる女性たちは、近年「大阪のおばちゃん」と呼ばれる人たちである。

しかし、私は宝塚に住んでいつも阪急電車に乗り、大阪のエレベーターにも数限りなく乗っているが、こんな傍若無人で、下品な女性たちに一度も出くわしたことがない。こうした女性には現実には存在せず、「大阪のおばちゃん」の特徴とされるもの多くはフィクションなのである。大阪の女性たちは、たしかにおしゃべり好きかも知れないが、それは周りを楽しませるためなのであって、ちゃんと気配りをするから他人を不快に陥れることはない。

「大阪のおばちゃん」というフィクションは、どのように生まれたのか。おそらく大阪人を面白おかしく採りあげるテレビ番組たちが、誤ったイメージを伝えたのだろう。思えば、私たちの番組「探偵！ナイトス

プロフィール

滋賀県生まれ。京都大学法学部を卒業後、朝日放送入社。人気番組「探偵！ナイトスクープ」プロデューサー、大阪芸術大学教授。1991年放送の「全国アホ・バカ分布図の完成」編が日本民間放送連盟賞・テレビ娯楽部門最優秀賞、ギャラクシー賞選奨、ATP賞グランプリを受賞。主な著書に『全国アホ・バカ分布考——はるかなる言葉の旅路』（新潮文庫、1996年）など



「大阪のおばちゃん」というフィクション

まつもと おきむ
松本 修

クープ」もその当事者のひとりだったのである。

近年、「大阪のおばちゃん」は、豹柄の服を着ている、また、「あめちゃん」を道で出会った人にも分け与えてくれるなどと言われるが、これらは明らかに私たちが発信源である。

かつて「大阪のおばちゃん」は、豹柄の服が好きなのではないか？」という探偵依頼に応じて市内の商店街でロケをした。テレビの画面では、探偵は次から次へと豹柄のおばさんに遭遇し、スタジオは爆笑の渦となった。まるで大阪は豹柄のおばさんだらけのような錯覚をおこすビデオだが、実際は何時間もロケして出会った豹柄の女性数名を編集でつないだだけのことなのである。「あめちゃん」にしても同じで、これも膨大な数のおばさんたち取材して、「あめちゃん」をくれた数名のみを巧みに編集したものである。豹柄の女性も、「あめちゃん」をくれる女性も、実際にはほとんどいない。

あくまで楽しい「ネタ」として放送してきたものだが、いつの間にか「大阪のおばちゃん」の特徴として定着していった。映画のように世にマインナスのイメージで捉えられているとなると、ちゃんとした都会人たる大阪女性に対して、いささか申し訳ない気持ちになる。

月刊
みんぱく

12月号目次

- | | |
|--|--|
| <p>1 エッセイ 千字文
「大阪のおばちゃん」というフィクション
松本 修</p> <p>2 特集
大阪のなかの異文化</p> <p>3 大阪の味は混交としたまったり味
奥村 彪生</p> <p>4 綱・ちゆら・エイサー祭
——与那原大綱曳 in 大正区 金城 馨</p> <p>6 ネオ関西弁——「方言萌え」の流れのなかで
真田 信治</p> <p>7 私鉄王国の文化 久保 正敏</p> <p>8 駅前の異空間アンダーグラウンド
——わが街・新宿と大阪駅前ビル 菅瀬 晶子</p> <p>10 研究フォーラム
肉食行為の研究
野林 厚志</p> <p>12 みんぱく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行
研究所か博物館か
——サンクトペテルブルクの人類学民族学博物館
佐々木 史郎</p> <p>16 連載リレー 知の収蔵庫
CRPS とこんには! その1
脳の不思議
菊澤 律子</p> <p>18 多文化をあきなう
商品のバックグラウンドを想像する
和坂 友利江</p> <p>20 異聞逸聞
もうひとつの“親族”——チワン族の「ラオトン」
塚田 誠之</p> <p>21 みんぱく私の逸品
桂米之助アーカイブ
高橋 安司</p> <p>22 フィールドで考える
発掘は誰のため
松本 雄一</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|--|